

## 夏に流行するこどもの風邪のこと

これから夏風邪が流行する時期ですね。夏のウイルスの感染でおきる夏風邪について、まとめてみました。

- ・手足口病、ヘルパンギーナ、プール熱の3つが有名です。その他、流行するウイルスにより、エコーウイルス発疹症、無菌性髄膜炎が流行する年もあります。あるいは心筋炎や脳炎など重症な疾患を起こすこともあります。“夏風邪はたちが悪い”と言われているゆえんです。

- ・夏風邪を起こすウイルスは、のどよりもおなかの中の腸管内でよく増えます。つばだけではなく、便中にも大量に排出されます。トイレや手洗い場、おむつ交換の際に付着した便などを介して感染することが多いです。

- ・普通のアルコール性の消毒液、また消化液（胃液、膵液、胆汁）内でも死なずに増殖できるタイプのウイルスで、症状が消失し、回復したお子さんでも、その後数週間は便中にウイルスを排出し続けるので、一人発症してしまうと、いかなる処置をとっても園内の流行は止められないといわれています。つまり、出席停止の措置はあくまで急性期のお子さんの状態を悪化させないためであって、残念ながら感染防御の効果はないということです。

- ・まだ有効なワクチンも開発されていないため、結局免疫ができるまで一生のうち何度か感染して発症してしまうといわれています。免疫ができるまでは発症してしまいますので、発症時の対応で拗らせないようにすることが大事となってきます。

### 1. 手足口病

コクサッキーウイルスが原因で、手のひら足の裏、口の周囲、膝、お尻などに、芯のある水ぶくれが集まって出てきます。口内炎ができることもあります。高い熱が出ることは少ないです。昨年、大分市ではコクサッキーウイルス A6 というタイプの、たくさんの水疱瘡のように中心に痂痂のある水ぶくれが大量にできたり（実際みずぼうそうと誤診された例もあり）、中には爪がはげたりする、かなり派手な症状を呈する手足口病がはやりました。見た目は派手ですが、重症感はなく、便の状態や回数が正常で、熱もなく、食事が取れば集団

生活に戻しても構いません。しかし、エンテロウイルス71という手足口病を起こすウイルスが流行する年は要注意で、無菌性髄膜炎や、おそろしいことにウイルス性脳炎を起こすことがあります、注意が必要です。実際2000年、熊本でエンテロウイルス71による手足口病が流行した際には乳児のエンテロウイルス71脳炎が発症しています。注意喚起してゆきます。

## 2. ヘルパンギーナ

主にエコーウイルスが原因で、39-40度の高熱が3-4日続き、のどの奥にアフタという多数の口内炎ができる夏風邪です。ひどく口の中を痛がります。つばも飲み込めず、ヨダレを垂れ流すこともあります。手足口病よりも重症感があります。一番困ることは、のどの痛みのために、食べ物や水分が取れないことで、脱水症になることもあります。その場合は輸液療法や、場合によれば水分や食べ物がとれるようになるまで、数日間の入院療法が必要になることもあります。熱いものや刺激のあるものは取れないので、冷たいものやゼリーなどの柔らかくのと越しの良いものを与えるとよいでしょう。

## 3. プール熱、あるいは咽頭結膜熱

アデノウイルスによる扁桃炎で、熱が5-7日間も続き、以前は夏のインフルエンザといわれていました。39-40度の高熱が稽留し、鼻が詰まります。しばしば目が赤くなり、目やにがでてくることも多いです（多くは片目だけ）。のどの診察で、扁桃炎がある場合（多くは赤いだけでなく、白い苔様の浸出物が付着している）は、アデノウイルスや溶連菌の迅速診断を行い、病原体の存在を確認することができます。が、インフルエンザと違い特効薬はなく、長く続く発熱や鼻づまりのきつさを少しでも取り除いてあげるように、水分多く取らしたり、場合によっては解熱剤のお世話になったり、蒸しタオルで顔を拭いたり鼻水をまめに吸引してあげて鼻閉対策をしたりして嵐が過ぎるのを待つしかありません。高熱は長く続き心配でしょうが、アデノウイルス感染症は意外に悪いものではなく、けいれんや脱水さえ起こさなければ、多くは入院や輸液療法の必要はないと考えられています。1週間近くして解熱するときは、一時的ですが、逆に35度以下がるなどと低体温気味になるお子さんや機嫌がむしろ悪くなるお子さんもしばしば見受けられます。とくに鼻づまりの残存に手を焼くこともあります。

※ 夏風邪のウイルスは、年によって、あるいは地域により、流行するウイルスが異なり、どのウイルスが流行しているのかを先に知るにより、その年や土地での夏の風邪の症状のパターンや重症度を予測することができます。以下に近年の大分市の流行ウイルスとそれによる病気を列挙しました（大分こども病院での検体）。

2014年 パレコウイルス3型による新生児・早期乳幼児のウイルス性脳症や敗血症。

2015年 エコーウイルス18型による乳児のエコーウイルス発疹症と学童児の無菌性髄膜炎。エンテロウイルスD68による年長者の重症喘息発作。

2016年 パレコウイルス3型による新生児・乳児の発熱と年長児の発疹症、成人の流行性筋痛症。コクサッキーウイルスA6による派手な手足口病。

2017年 ??? ……新生児や早期乳児の赤ちゃんに起こすタイプのウイルスがはやったり、髄膜炎、脳炎、心筋炎などの重大な合併症を起こすものはやらないといいたのですが……。

文責 神菌慎太郎